



YMCA パイオニアストーリー

近代スポーツの普及とYMCA

日本初のオリンピック監督・大森兵蔵の生涯

東京YMCA体育館略年表

1880年 (明治13年)	東京YMCA創立
1894年 (明治27年)	神田に初代会館建設
1907年 (明治40年)	山本邦之助総主事が欧米視察
1908年 (明治41年)	大森兵蔵が体育主事に就任 バスケットボールとバレーボールを紹介
1913年 (大正2年)	1月、大森兵蔵死去 10月、北米YMCA主事F. H. ブラウン来日 (=写真)
1917年 (大正6年)	日本初の室内温水プール付総合体育館建設。クロールなど近代泳法を普及。記念式の案内書には「この運動場の特長は、命令的に行はるるにあらずして、社会的に行はるるにあり、且つ日本には当来類例のない面白き新式の競技体操を行ふを得るにあり」とその画期的な楽しさを謳っている。
1923年 (大正12年)	関東大震災・体育館焼失
1927年 (昭和2年)	体育館修復工事完成
1930年 (昭和5年)	デンマーク体操講習会
1932年 (昭和7年)	ロサンゼルスオリンピック水上チームが東京YMCAで強化合宿。水泳だけでなく食事のマナーなども学んだ。YMCA主事で体操指導者の柳田亨がトレーナーとなり、渡米のための2週間の船旅で「陸上トレーニング」を実施。金メダル5個という快挙へ導いた。
1940年 (昭和15年)	1940年開催予定だった「幻のオリンピック」のため東京YMCA理事長・山本忠興が招致活動に参加。国際ホテル専門学校を設立して外国人選手を迎える準備をした。
1943年 (昭和18年)	戦時下では「大東亜体育館」と改称しながらも活動を続けた。
1945年 (昭和20年)	終戦後YMCA会館・体育館はGHQに接收
1949年 (昭和24年)	接收解除、会館返還
1950年 (昭和25年)	女子が初めて体育館使用を認められる
1962年 (昭和37年)	YMCA協力主事アール・バックリーがオリンピック東京大会の渉外部嘱託となる
1963年 (昭和38年)	体育館建て替え工事開始
1964年 (昭和39年)	10月10日東京オリンピック開幕。東京YMCAは神田の会館内にインフォメーションセンターを設置。案内ボランティアを務めた。また国際ホテル専門学校生たちは選手村の運営を手伝った。国際オリンピック委員会(IOC)会長ブランデー氏 (=写真左から2人目)はオリンピック開催の最中にYMCAを訪れ、スピーチを贈られた。「一国の富はどのような資源や施設をもつかによって測られるべきではない。次代を担う青少年がどのような環境のもとに、どのような理念によって育てられているかで決定されるべきである。この意味においてYMCAの社会に果たすべき役割は大きい。」
1965年 (昭和40年)	東京都より東京オリンピック大会協力感謝状授与。2代目体育館が完成。



日本初出場のオリンピック・ストックホルム大会の入場(1912年)。後列左から2人目が大森兵蔵



大森兵蔵は1876年(明治9年)岡山県生まれ。東京高等商業学校(現・一橋大学)入学後、米スタンフォード大学経済学部で留学。しか

今から約100年以上前。「兵式体操」や「普通体操」が主流だった大正初期の日本に、YMCAは多くの近代スポーツを紹介した。「青少年の健全な育成」のため、誰もが楽しめるスポーツを普及しようという力を尽くしたYMCA主事たちの中から、今年のNHK大河ドラマ「いだてん」にも登場予定の「大森兵蔵(おおもり・ひょうぞう)」を紹介したい。(広報室)

国民の体格向上に尽くす決意  
当時の北米YMCAは国内300カ所以上に体育館や温水プール、図書室、カフェテリア、宿舎などを備えた大きな会館を作り、青少年の「精神的、社会的、体育的」向上のためのプログラム(Four Fold)を学んだ。

最先端のスポーツを学んで  
入学後に兵蔵が学んだのは、生理学、体力測定、マッサージ、衛生学、健康診断法、トレーニング方法、体育史などの科目と、バスケットボール、バレーボール、フットボール、ホッケー、陸上競技、器械体操、屋外遊戯といった、まさに最先端の体育・スポーツの理論と実技である。

バスケット・バレーを初めて紹介  
1908年に帰国後は東京YMCAで初代体育主事となり、日本ではまだ誰も知らなかったバスケットボール・バレーボールを紹介したほか、陸上競技の指導などもしてスポーツの普及に努めた。日本女子大学や慶応



兵蔵が作ったコートでバレーボールする会員(写真・東京YMCA)  
兵蔵はまた安仁子夫人と共に社会福祉施設「有隣園」を作った。幼稚園と授産所、図書館を兼ねた先駆的なもので、安仁子夫人は後に兵蔵が亡くなったからもこの施設の運営を続けたという。

先駆者への逆風 英語講師に転身  
兵蔵と同時期に欧米を視察した東京YMCA総主事・山本邦之助もまた、日本にぜひ体育館と室内プールを建設したいと考え、理事会に提案した。しかし明治以降日本では、一般庶民がスポ

日本初のオリンピック監督に  
この頃から兵蔵は肺結核を発病した。にもかかわらず1911年には、講道館柔道の創始者・嘉納治五郎の要請により「大日本体育協会」の創設に携わり、その総務理事に就任。400mトラックのある競技場を新設してオリンピック予選競技会を開催し、翌年スウェーデンのストックホルムで開催された第5回オリンピックに、日本で初めて2人の選手を送るこ

まかれた種は 大樹となつて  
それから約半年後の1913年10月、北米YMCAからF・H・ブラウンが派遣される。彼は17年間わたって日本に滞在し、兵蔵の後を継いで各種スポーツの普及につとめた。1917年極東選手権大会のバスケット

「(Gym)を勢力的に展開。学校や仕事帰りのさまざまな青年たちが集い、レクリエーションやスポーツ、教養プログラムなどを楽しみ、有意義な余暇を過ごしていた。大森兵蔵が入学したYMCAスクールは、その事業を運営・指導するためのスタッフ養成所である。彼自身は身体が弱かったが、だからこそこの北米YMCAの活動に惹かれたのではないかと語られている。YMCAの体育主事として来日するF・H・ブラウンの勧めもあって、「日本の国民の体格体位の向上に尽くす」と決意した。

大学などでも指導したほか、当時YMCAが発行していた雑誌「開拓者」にも論文を発表するなどして、アメリカで学んだ健康観を広めていく。1909年の「開拓者」第4巻には、「国民の健康については言えば、病院のような疾病の療養施設はあるが、健康増進を目的とした設備がない」「屋内体育場をもつと用意すべきである」とある。

とを決めた。マラソン選手の高橋四三と、短距離の三島弥彦である。兵蔵は唯一の欧米スポーツ経験者としてオリンピック監督に選ばれ、悪化していた結核をおして命がけで渡航する。長旅の途中でも吐血し、安仁子夫人に付き添われ、時に選手に背負われることもあったという。大会後は帰路のアメリカで、日本に帰ることなく亡くなった。37歳だった。

近代泳法はじめ飛込み、器械体操、ボクシング、レスリングなどを紹介し、一般庶民にスポーツの楽しさを広めた。特に温水プールはその後数十年間、唯一の冬の練習場だったため、日本の主要な選手たちがここで育つていった。

大森兵蔵の志は多くの人に受け継がれ、日本近代スポーツの発展へと開花していったのである。

◇編集協力:岩瀬康彦  
◇出典(含・写真)『白夜のオリンピック』幻の大森兵蔵をもとめて(水谷豊 著平凡社 他)

また1913年の理事会ではようやく、日本初の室内温水プール付き総合体育館の建設が決まり、1917年に完成。大森兵蔵の生涯は、近代泳法をはじめ飛込み、器械体操、ボクシング、レスリングなどを紹介し、一般庶民にスポーツの楽しさを広めた。特に温水プールはその後数十年間、唯一の冬の練習場だったため、日本の主要な選手たちがここで育つていった。

### ■山手会館 耐震工事3月に完了見込み

内装工事も着々と進行 LED照明で明るく



2018年7月から実施している山手会館の耐震工事は、設備の改修や照明のLED化、床や壁の補修など内装工事にあわせて予定どおりに進行しています。すでに地階のプールは夏休みに工事を行い、9月よりプログラムを再開しておりますが、語学クラスや山手学舎など他プログラムは3月以降、代替地から山手会館へ順次引越しできる見込みです

会館をご利用の皆さまには、恒例のバザーやクリスマス会も開催できないなどご不便をおかけしましたが、2019年4月にはより快適にお過ごしいただける会館としてオープンできるよう準備を進めております。

1952年の山手センター創設以来、乳児から高齢者まであらゆる方々に愛されてきました。リニューアル後もどうぞよろしくお願ひいたします。

(山手コミュニティーセンター 星住秀一)

### ■国際部がクリスマスパーティ主催

年齢、国籍も越えて64人が参加



年齢も国籍も超えて、みんなでYMCAらしいクリスマスパーティを楽しもうと、東京YMCA国際部主催の新しい企画「Tokyo YMCA International Christmas Party」を12月15日、東陽町センターで開催。各国の留学生やYMCA会員など、さまざまな64人が集いました。

クリスマス礼拝ではRichard East宣教師による「The First Christmas (最初のクリスマス)」と題した英語のメッセージに耳を傾け、讃美歌も英語で歌いました。続いて東京YMCA国際委員によるレクリエーションやバンド演奏のほか、東京YMCAにほんご学院の留学生たちからは、各国のメリークリスマスが披露されるなど、まさにインターナショナル！初めて会った参加者同士もすぐに打ち解け、笑顔が広がりました。ターキーほか色鮮やかな食事にデザート、サンタからのプレゼントなど、終始楽しいパーティとなりました。来年もぜひ多くの方のご参加をお待ちしています。

(国際部 戸坂昇子)

### ■東陽町クリスマスオープンハウス

ゴールドジムも参加、学生たちも大活躍



12月23日(日)曇り空の中、東陽町センタークリスマスオープンハウス(=実行委員長・大沼謙一氏)が開催されました。今年も近隣小学校先生方による餅つき、東陽二丁目町会の焼きそば、会員やワイズメンズクラブによるカレーやクレープなど本格的な模擬店が並んだほか、深川消防団やスターツCAM株式会社による災害体験コーナー、近隣小学校の絵画展、江東区東陽地区少年団体連合会による子ども遊び場、ゴスペルコンサート、バザー、抽選会など、多くの地域の方々に参加・ご協力くださり、大勢の来場者で館内中がにぎわいました。

オープニングは江東YMCA幼稚園の保護者会によるハンドベルと、元ミュージカル女優の永吉美穂さんによるクリスマスソングで華やかにスタート。昨年4月から館内のスポーツ施設を運営しているゴールドジム東陽町スーパーセンターの皆さんもポップコーン販売やお餅つきに参加くださり、文字通りオープンハウスとして会館全体で開催することができました。また、東京YMCA社会体育・保育専門学校やにほんご学院の大勢の学生たちがボランティアとして活躍してくれました。

売り上げは目標を上回る60万円となり、国際協力、災害復興支援、地域活動、青少年育成活動のために大切に用いさせていただきます。ありがとうございました。来年は12月23日が祝日ではないため、日程変更の予定ですが、今まで同様に継続してまいります。

(東陽町コミュニティーセンター 沖 利柯)



↑柔らかいボールを使い狭い場所でも遊べるよう開発された「野球あそび」



↑「バーの足でとるんだよ」など子ども向けの声かけを学びました。

## 子どもの「野球あそび」指導者養成へ 読売巨人軍が特別演習

東京YMCA社会体育・保育専門学校で

社会体育・保育専門アカデミーの講師による「幼児体育指導演習 ベースボール型球技」を実施しました。この「ジャイアンツアカデミー」と当校はこ

れまでも、実習先として関わってきました。が、幼稚園や保育園あ

るいは学童保育で「野球あそび」を指導できる指導者を育成したいアカデミーと本校の指導者育成の目的が合致し、今年度は演習の開設に至りました。

授業は、講義6時間、実技6時間、アカデミーでの実習6時間と計18時間行われ、スポーツインストラクター科子どもスポーツコースの2年生17名が受講しました。

今では、NPB(日本野球機構)の各球団はいずれも少年向けスクールの開催していますが、とりわけ読売巨人軍は、幼児向けの指導の最先端を行っている。

授業では、幼児と小学校低学年をイメージして、基本的な指導法の理解をした上で数種類のゲーム形式の練習へと進み、その後はアカデミーに行き、実際の子どもたちへの指導に参加しました。

すでにジャイアンツアカデミーには、フランチヤイズを含めて3名の卒業生が勤務しており、今後も学生たちが就職先で野球あそびを実践できるよう、次

年度以降も継続して行うことを計画しております。本講義の詳細は、読売巨人軍のホームページにも掲載されています。専門学校 杉内伸生

## 保育士研修の新たな可能性をさぐる フィンランドへ保育視察



ロバニエの保育園。家庭のリビングのような保育室で、「生活」を基本とした保育が展開されている。

2018年4月に保育指針が改訂され、その前年には東京YMCAの保育の理念・方針等が組織決定されたことにより、私たちの保育事業が歩んでいくべき方向性が明確になった。こうした状況を受け、昨年、東京YMCAは組織改編を行い、全ての保育園をチャイルドケア事業部としてまとめ、現在少しずつではあるが各園の実状

2018年4月に保育指針が改訂され、その前年には東京YMCAの保育の理念・方針等が組織決定されたことにより、私たちの保育事業が歩んでいくべき方向性が明確になった。こうした状況を受け、昨年、東京YMCAは組織改編を行い、全ての保育園をチャイルドケア事業部としてまとめ、現在少しずつではあるが各園の実状

今回はそこにさらに検討すべきポイントを加えた。それが東京YMCA社会体育・保育専門学校の保育科の研修旅行と、ヘルシンキYMCAとのパートナーシップの可能性の検討である。こうして保育園の各園長、運営委員、現地の案内役講師に加えて、専門学校スタッフ、副総主事も参加することとなり、結

果として私も含めて総勢9名という大所帯となった。期間は11月25日からわずか6日間。しかも講師からの提案でラップランドのロバニエとヘルシンキの2箇所を滞在となったため、もう少し日数が欲しいところではあったが、各人のスケジュールを調整するとこれが精一杯であった。ロバニエでは公立2園と私立1園の保育施設を見学した。今回は下見のため多様な施設を見せて欲しいと要望していたためその3園はそれぞれ特色があり、その保育の中身もいろいろの違いがあった。しかし「生活」を基本とし、家庭のリビングのような保育環境

を踏まえながら園長と協働して様々な改革を行っているところである。そのひとつのポイントが職員研修改革であり、ミドルクラスの研修検討の一環としてフィンランド研修が浮上り、各園園長と共に現地を下見することになった。

今回はそこにさらに検討すべきポイントを加えた。それが東京YMCA社会体育・保育専門学校の保育科の研修旅行と、ヘルシンキYMCAとのパートナーシップの可能性の検討である。こうして保育園の各園長、運営委員、現地の案内役講師に加えて、専門学校スタッフ、副総主事も参加することとなり、結

で、職員もソファでくつろぎながら自然体で子どもと向き合っている姿勢などは、大変参考になった。ヘルシンキではYMCAを訪ねた。ここは学童クラブや青少年の居場所プログラムが活発で、特に学童クラブは行政からの評判も高く、今後は保育園も開設の予定である。また近郊の湖畔には野外活動施設もあり、東京YMCAとは保育のみならず様々な交流の可能性が感じられた。今回の下見を課題別に総括し、2019年度の研修プログラム等としてまとめていく予定である。(チャイルドケア事業部 統括 秋田正人)